

---

# 空色電池

ムニブニ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空色電池

### 【著者名】

ムニーフニ

### 【あらすじ】

旅に出たい衝動は誰にでもあるんじゃないかな?

そんな衝動にかられた僕が田舎の電車で青春しちゃって、そんなお話

これ、青春だよね?

(前書き)

部活の座談会用の三題廻『ラムネ、傘、北国』既に部員に「テンパンにされましたか、さらに広い意見を聞きたくてあえて改稿せずには投下です。

執筆時間は徹夜で六時間弱。見苦しかつたらすいません。

窓を開けると湿った風の匂いがした。

僕は横ヘリュックを置き、ボックス席に座った。本来ならマナー違反だらうけど、席には十分な余裕があるからいいだろ。というか、今のこの車両には僕しかいない。田舎の路線電車とはいえ、廃線にならないか心配になつてくる。なんとなくそうなるのは嫌だな、と軽く溜息を吐いた。

それにしてもずいぶん遠くまで来たものだ。

特に行き先も決めず、あてもなく、ただ無性に旅がしたくなつたから、旅に出ようと思つた。

僕は自分で思つていたよりも単純な人間だったようで、思つたらすぐに、リュックに最低限の着替えとお金、それからスケッチブックと鉛筆を詰め込んで、旅に出でいた。

そして、気がついたらこんな田舎まで来ている。

どうせしばらくは暇なんだし、人生経験の一環としては悪くないだろう。

深く考へることはせず、僕は車窓から外の景色を眺めることにする。

明け方まで雨が降つていたのだが、今ではすっかり止んで真つ青な空が広がつていた。

「早く発車しないかなあ」

発車まであと数分。

それまでは青空くらいしか見るものはない。ま、僕はそれでも構わないんだけど。

しばらぐぼーっと空を眺めていると、アナウンスが聞こえてくる。よつやく発車するらしい。

僕はスケッチブックを取り出して、いつでもスケッチできるよう準備した。今回の旅で心に残る風景をスケッチするために持つて

きたものだ。僕は風景を眺め、新緑をたんのうする。

「相席いいですか？」

顔を上げると、女の子が立っている。くじくじとした眼と明るい茶髪が印象的なかわいらしい女の子だ。年齢は、僕より一、三年下つてところだらう。

「どうぞ」と僕は笑いながら、前の座席を示す。

「ありがとうございます」と微笑みを浮かべ、女の子は席に着いた。

「よかつた、あたし一人じゃなくて」

「ああ、確かにほとんど誰もいませんもんね」

「地元の人もほとんど使わないらしいから。この電車」

あれ？ と、僕は首をかしげる。

「お兄さんは旅行？」

「そうだよ」

「もしかして一人旅？」

「うん」

「じゃあ、あたしと一緒に」

「…………」

こういうのは失礼かもしだれなけれど、大丈夫なんだろうか？ 服は水色のワンピース、これは問題ないとして。水色の長靴、手荷物はハンドバックと傘だけ。旅行をするにはちょっと軽装なんじゃないだろうか。それ以前に女の子の一人旅はいろいろと危険だと思うのだが……。

「大丈夫なの……ですか？」

率直に訊ねた。一応、初対面なので敬語で。

女の子はきょとんとした表情で首を傾げる。

「いや……その、女の子の一人旅はなにかと危ないんじゃないかなつて……」

女の子が少しづつ頬を膨らませるので、尻すぼみになってしまつ。

「あたし、子供じゃないもん！！」

いや、そういう意味じゃなくて……。

そっぽを向かれてしまった。下手に言い訳しても、火に油を注ぐだけな気がするので何も言えない。

別にこのままでも何の問題もないはずだけど（まあ、初対面だし）

やつぱりちょっと気まずい。

「えっと……気を悪くしたなら謝るから……」

「…………」

「……あ、甘納豆食べる?」

「…………甘納豆?」

女の子は訝しげに僕を見る。

「納豆が甘いの?……え、なにそれ気持ち悪いんだけど……」  
引いていた。ドン引きだつた。え、甘納豆しらない?

「豆を糖蜜で煮て、砂糖をまぶしたお菓子だよ」

論より証拠（誤用）なので、僕は鞄の中から甘納豆の袋を取り出した。

「手を出しちゃ」

女の子はジタバタでうらうら見てくる。僕は数個手にとって、差し出した。

「騙されたと思って。一粒でもいいから!」

恐る恐るといった様子で、女の子は手を伸ばし一粒つまむ。緩慢な動作で、口に運んだ。赤い唇に消える瞬間まで、息を殺して見つめる。

アレ? なんか変態チック? といつか、食事中を見つめるのはマナー違反だよね、普通。はい、すみません。

軽い自己嫌悪を済ませ、もぐもぐと口を動かす女の子を僕は見つめる。

「クン、と女の子の喉が動いた。

「ど、どうですか?」

思わず敬語。

「うーん……おこしいけど……」

「け、けど……?」

「クン、と思わず睡をのむ。

「一粒じや、ちょっと……」

そう言いながら女の子は頬を赤らめ、遠慮がちに手を伸ばした。僕は嬉しくなって、両手いっぺいに甘納豆を取り出す。

「そ、そんなに食べれない……」

「あ、いや、つい……」

女の子が数粒てのひらにとつたので、僕は残りを口にまわつらむ。甘いものはいくらでもいける。うん、女の子が驚いてるナゾ気にしない。引いてるけど気にしない。袋にまだ残りがあるし、問題ない。

YES、無問題。

脳内で軽い自暴自棄を済ませて、僕は手をはらひ。甘納豆の唯一の欠点は手が砂糖で汚れること。……流石に舐めないよ？

「これ、本当においしい

「でしょ？」

麦チョコと甘納豆はつまんで食べるお菓子の最高峰だと思つ。手は汚れるけど。

そういじてゐうちに駅に到着するアナウンスが聞こえてきた。女の子はおりないようで、

駅に到着したら、「あ……」と何か思ついたように、女の子は電車を降りてしまった。何も言わずに。

「…………」

取り残された感が妙に切ない。別に気にしてない。こうすることもある。うん、甘納豆食べよう。いや、とつとおきの水ようかんを食べようか。こんペいとうとこう手もある。

とかなんとか現実逃避をしている間に、電車が動き出す。

僕はかりんとうをボリボリかじりながら、窓の外を見つめる。新緑は目に眩しいが、ずっと同じだとスケッチが進まない。

唐突に、冷たいものが首に触れた。

「ひよわっ！？」

変な声でた。

僕が振り返ると、女の子が満面の笑みで立っていた。手には昔ながらのラムネが二つ。

「お菓子のお礼」

「二つと朗らかに笑いかけられる。なんとなく、その笑顔が嬉しくて、僕は笑い返した。

僕はラムネを受け取り、女の子が向かい側に座る。

「……開かない」

プラスチックのものに比べて、昔ながらのビン入りのラムネは少々硬い。見かけ通りあまり力がないようだ。

僕は栓をグツと押し込む。コン、とラムネ玉がビンの中に落ちた。「はい」と僕はビンを交換し、再び栓を開ける。

「あ、ありがとう」と女の子は笑った。それから恥ずかしさを隠すためなのか、勢いよくビンを傾ける。

「いやぐつー？」

可愛らじい奇声を上げながら、少女はビンから口を離す。

「の、飲めない…………！」

「めん、やると思った。

僕は苦笑しつつ、

「ほらここに滲みがあるでしょ？　ここに玉を引っかけるようにして飲むんだよ」

と言うと、頬を真赤にして女の子はキッと視線を返してきた。

「し、知ってるもん！」

ニヤニヤ笑いを浮かべてないことを願いつつ、僕はラムネを飲む。

「ユキ」

「へ？」

「佐倉由紀。あたしの名前だよ。なんか今更だけど、自己紹介」

「え、あ……。僕は山下幸紀」

「うん、ユーキさんね。覚えた」

何度か頷いた。

「ねえ、お話しよつよ」

ユキはクスクスと笑う。

「『一キさんはどうしてここにいるの？』

「え？ どういう意味？」

「うーん。……どうして一人旅してるの？」

「どうしてつて……なんとなくかなあ」

「なんとなくなんてないんだよ」

ユキはトントンと胸を叩く。

「意識はしてなくとも理由があるはずだよ」

「…………… そうなのかなあ」

正直、よく解らない。理由もなくイライラだとか、虚しくなるとか、よくある話だと思つ。特に僕やユキの年頃は多感な時期らしいし。

「やつはうつ病はどうして一人旅してるの？」

「あたし？ うーん、あたしはねえ……充電中かな

「充電？」

「うん、充電」

ユキは困ったような微笑みを浮かべた。

「なんていうか……疲れちゃつたのかなあ」

僕はその笑みから目が離せない。

「頑張つて頑張つて、そんしなくちやいけないって思つこんで、自分を騙して、周りの考えを鵜呑みにして…………ちょっと意氣込み過ぎちゃつたのかなあ……」

薄い表情でユキは空を見た。

「あたし、青空が大好きなんだ」

「だから全身水色？」

「ぶう。これは空色だよー」

ユキはパタパタを足を振つた。

「この長靴かわいいでしょー？」

「うん、まあ……」 実用的ではなさそつだけど。

「青空つて広くて、澄んでて、きれー」

ふつとユキは俯いた。

「だから、空色の服を着て、一回充電中なのです」

「二口つとユキは笑った。

「知ってる？ 晴れた日の夕方の空つて、すぐ幻想的なグラデーションなんだよ？」

「確かにね」

「前はね、そんなの見たことなかつたの。まあ、住んでたところが北国だから畳つてたつていうのもあるかもしねいけど。それ以前に、空を見上げる余裕なんてなかつたから。それだけでも充電しに来た意味があつたよ」

キラキラと表情が輝きを帯びていく。

「このラムネだつて初めて飲んだ！ ユキさんのお菓子も初めてだつた！ あたしはもつと自分が知らないことを知りたい。もつともおおつとたくさん！ この温かい気持ちをたくさん胸に充電したいの！」

眩しいくらいきれいな笑顔。

ドクリと胸が動いた。

「温かい気持ちでもう一度考えたいの。どうして頑張つてるのか。どうして周りが正しいのか。別に反発したいわけじゃないの。納得したい。ううん、きっと納得はできないだらうけど、自分なりに一度真剣に考えたいの。だつて、逃げ出したくないから！」

ユキの頬は上気し、少し呼吸が乱れていた。それでも爽やかな笑みで、僕を見つめる。

「なんていうか……羨ましい」

素直に呟いた。

「僕はたぶん……いや、絶対逃げてきたんだ」

なんとなくなんて言つたけど、実はわかつてた。

「目の前の現実から逃げて、誤魔化して、調子を合わせて。そんな自分に嫌気がさしてるけど、目を逸らして」

ユキは真剣に僕の話を聞いている。聞いてくれる。

「そのうち限界が来て、言い訳して、諦めたふりして、また田を逸らして」

ユキはジッと僕を見つめる。見つめてくれる。

「でも、解つてた。知らんぷりなんてできない。それに……本当は、逃げたくなんてなかつたんだ」

ユキはこんな僕から逃げないでいてくれる。

「僕だつて自分を值踏みしたくなんてない。僕だつて限界を自分で作りたくない。別に勉強が嫌いなわけじゃないんだ。別にやる気がないわけじゃないんだ。だけど、だけど……うまくいかないんだ。やろうと思つても、気がついたら脱線してゐるんだ。それでまた自分が嫌になつて……」

だから、全部放り出して逃げてきた。

「でも、ヨーキさんはここにいるじゃない」

ユキは力強く笑う。

笑つて、くれた。

「本当に逃げ出そつと思つたら、生きてなんかいけないよ。前へ進もうつて意思があるから生きれるんだよ」

ふわり、と甘い匂いがする。ギュッと肩を抱かれた。

「きつとヨーキさんだつて充電中なんだよ。ここまで来て、感動したり笑つたり、温かいものがいっぱいあつたでしょ？」

「……うん」

「なら大丈夫。ヨーキさんはまた進めるよ。ゆづくりかもしれないけど、ちゃんと進めるから」

「……うん」

僕はユキから離れて、笑う。いつの間にか頬が濡れていたが、細かいことは気にしない。

「ありがとう」

「どういたしまして」

ふと思いつき、僕はスケッチブックを開く。

「なにしてるの？」

「旅の記念に感動した景色をスケッチしてるんだ」

僕は鉛筆を走らせた。

しばらくして、描き上げたのは

「あたし?」

「嫌だった?」

ふるふる、と首が横に振られた。

「ありがとう」

ビリリ、と一枚破り、ユキに差し出す。

「いいの?」

「僕の分はあるから」

「……ありがとう」

ギュッと手を握りしめられた。なんだかひどくすぐつたい。

「お礼を言うのはこのうちのほうだよ。君のお陰で、みづやく軸が定まつた」

たぶん、これ以上ないほど強固。

「ヨーキさんはこれからどうするの?..」

「そうだなあ……もっと充電したいし。もう少ししててもなくこのままかな」

ふふ、とユキが悪戯っぽく笑う。

「じゃあ、私と一緒にだね」

その声は鈴が鳴るような心地がした。

(後書き)

今まで自分の書いたことのないものを試してみたのですが・・・。  
・うーむ、色々いじりたいwww 後半をもつかし詰めてのば  
したいwww

これは青春でいいのかな？ うん、そういうことにしてみ  
感想などいじりましたらよろしくお願ひします！ これからも精進  
します！

そういえば、今まで書いたことないって今までの中一投下できてな  
いじやん・・・・い、いやプロジェクトはできるんだけど書きあ  
がらなくて・・・・(@ @ @ -)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8762p/>

---

空色電池

2011年1月2日20時25分発行